

“やさしさ”の脱構築? 太平健『やさしさの精神病理』を読む

The Deconstruction of "Yasashisa"; Reading 'Yasashisa no Seishin-Byouri: Moral Pathology of Tenderness' Written by Takeshi Ohira

新井克弥

大平健著『やさしさの精神病理』(岩波新書、95)のテキスト・クリティーク。精神科医、大平は、患者との対応の中から、70年代以降、新しい意味を持ったやさしさ＝ヤサシサが出現したと指摘する。70年代、やさしさはモノや人個々の性質をあらわす用語から、他者との連帯を志向することばとなったのである。当初、それは、ことばを介した他者介入型の「やさしさ」として出現するが、80年代に入り、“沈黙”を原則とする相互非介入型の“やさしさ”へと転じていく。すなわち、相手の気持ちを察し、相手と同じ気持ちになってメッセージを共有するスタイルから、相手の領域に入り込まないように気づかれ、空間を共有するスタイルへの変容である。本稿ではこのような大平の指摘する新しい“やさしさ”を、情報化社会・グローバル化社会におけるコミュニケーションの新しいスタイルと捉え、その可能性について、中野収のカプセル人間論、およびN. ルーマンのダブル・コンティンジェンシー理論を援用しながら考察。その社会的適応性を評価し、解り合えないことを了解し合うコミュニケーション、および共鳴・共振だけで結ばれるコミュニケーションの重要性を説いた。

キーワード

「やさしさ」、「やさしき」、他者介入/他者非介入、連帯・集団志向、〈きずな〉と〈ほだし〉、〈沈黙〉、共鳴・共振

目次

- I はじめに、問題の所在
- II やさしさのタイポロジー I……滑らかな関係性から集団志向へ
- III “やさしい”人のコミュニケーション＝理想の絆の追求と生身の他者の切断/他者のモノ化
- IV “やさしさ”のグローバリズム

I はじめに、問題の所在

本論は、太平健『やさしさの精神病理』(岩波新書、1995 以下『精神病理』)で展開される「やさしさ論」に関するテキスト・クリティークである。^{注1}

^{注1} 以下、引用注において何ら明記なく()内に数字が記されている場合は、『やさしさの精神病理』からの引用である。

『精神病理』において、大平は精神科医という立場から、患者を往診する中で発見した現代人の新しいスタイルのやさしさについて、事例を交えながら展開している。その後、本文献は社会学、心理学、マーケティングなど様々な分野で「やさしさ論」として引用がなされた。だが、その多くは、分析自体を評価しながらも、大平が抽出して見せた新しいやさしさ（以下「やさしさ」）を備えたパーソナリティに関する批判的記述に焦点が充てられている。いわば「かような人格は社会的に受容し難い」というわけである。だが、このような倫理的視点からの論調は大平の論述からすれば本意ではまいであろう。むしろ、大平は「やさしい」パーソナリティをニュートラルな立場から論じ、しかも今後、社会的性格となると指摘しているのだから。

そこで、本論では大平の主張する「やさしさ」に対して、社会学的、メディア論的・スペースタイプから、大平同様、中立的立場に基づき整理していく。ねらいは「やさしさ」という新しいコミュニケーション・スタイル/社会化の形式の抽出にある。

はじめに、大平はやさしさを四分類しているのので、これらについて定義しておく。^{注2}

- 優しさ……………近代語のプロトタイプとしてのやさしさ、他者との円滑な関係を形成する個人の性質についての描写
- ヤサシサ……………70年前後から出現した、集団や連帯を志向するやさしさ。「やさしさ」と「やさしさ」に下位類型
- 「やさしさ」……70年前後に出現した、集団化を志向する「他者内面介入型」やさしさ。ヤサシサの下位類型①
- “やさしさ”……………ポストモダンに出現した、集団を志向する「他者内面非介入型」やさしさ。ヤサシサの下位類型②

表1 ヤサシサの分類

優しさ ・個人志向 ・近代語のプロトタイプ (kind, gentle, swerve)	「やさしさ」 ・他者介入型 ・治療型	“やさしさ” ・他者非介入型 ・予防型
	ヤサシサ ・集団志向	
やさしさ ・他者との円滑な関係をはかる		

本論は以下の流れに従って展開する。はじめに近代語の〈優しさ〉と70年代以降の〈ヤサシサ〉を比較、定義を明瞭化した後に、続いて〈ヤサシサ〉の下位類型である「やさしさ」と“やさしさ”の概念を考察する。さら

^{注2} なお、何ら記号的分類のないやさしさは、すべてを包括した無定義の使用である。

に、今日的やさしさを備える“やさしい”人々のコミュニケーション・スタイルの構造的特性を分析し、そこから大平における“やさしさ”論の問題点を指摘。これらを乗り越える枠組みとしてN. ルーマンのダブル・コンティンジェンシー理論と中野収のカプセル人間論の援用を試みられる。最終的に、新しい“やさしさ”が、ポストモダンの時代におけるグローバルなコミュニケーション・スタイルの可能性を潜在的に秘めていることを指摘してゆく。

II やさしさのタイポロジー I ……滑らかな関係性から集団志向へ

(1) 優しさとくヤサシサ>

a) 優しさ=やさしさのプロトタイプ / 滑らかな関係性を築くための個人的な価値

まず、古典的なく優しさ>と70年前後に誕生したくヤサシサ>について確認しておこう。

<優しさ>=近代語としてのやさしさは、「柔和さ、穏やかさ、親切さ、優美さ(古)、けなげさ(古)、たやすさ(古)、引け目を感じること(古)」(『広辞林』、(古)は古語、筆者注)である。大平は、この<優しさ>は「人の心を和ませるような性質の一種」であり、それは「娘達や花の美德としては認められはしても、「華奢」の弱さに通じるマイナーな価値」しか与えられておらず、加えて「優しさは『与するに易しい』」ことでもあった(165)と指摘する。これは、今日、広く人口に膾炙するやさしさ(後述するくヤサシサ>)とは意味を異にしている。換言すれば、近代語としての<優しさ>は、ほとんど死語である。

<優しさ>が人間の性質を表現する際に用いられる場合には「英語のテンドーやジェントル、スワーヴ」(69)と同義になる。すなわち、広辞林が古語としては扱わなかった「親切さ」「穏やかさ」、加えて「物腰の柔らかさ」「育ちのよさ」といった側面に焦点が当てられる。これらを、大平は現代のくヤサシサ>と共通する語義として「身近な人々の滑らかな関係を保つだけの個人的な価値」(69)と要約する。換言すれば、<優しさ>とは第三者から観察された他者の性質についての描写であり、この時点では主体が客体に向けて「優しくする」というような他動詞的運用はおこなわれていない。

b) ヤサシサ=「やさしさ」と“やさしさ”に共通する特徴(155)

だが70年代前後、やさしさはく優しさ>からくヤサシサ>(=「やさしさ」、後に“やさしさ”)となることで、個人が主体的、他動詞的(例:やさしくする)・目的語的(例:やさしさをかける)に運用する言葉に転じていく。そして、このような近代語からの変容、逸脱要素として大平は三点を挙げている。

1. 規則の黙契化。くヤサシサ>(=「やさしさ」/“やさしさ”)の規則(ルール)は、「習慣だから言葉になっていない。よく機能している習慣は、何でもアウンの呼吸でおこなわれる。」(155)、2. 日本国民のハヴィトス。「身内じゃなくても、日本人なら本来は、ヤサシサ(=「やさしさ」/“やさしさ”)の規則を心得ている。」(156)、3. 「連帯」拡大指向。「できるだけ、そのヤサシサ(=「やさしさ」/“やさしさ”)をソトの人にも向けたいと皆、思っている。」(156)

すなわち、〈ヤサシサ〉は、他者と滑らかな関係を維持するのみならず、日本国民全体が無意識のうちに相互に運用することによって、「連帯」や「集団であること」、「協調していること」も実感可能にするのである。

(2) 「やさしさ」……他者介入型=気持ちの〈察し〉+連帯・集団志向

〈ヤサシサ〉は、先ず「やさしさ」=他者介入志向のやさしさとして登場する。

大平はその契機を学園闘争に見ている。「学園闘争の閉塞状況のもとで、当時の若者たちは、自分も他人もともに弱い傷ついた者である、と認識し、「互いの傷を舐め合うようなやさしさ」が求められ始めた」(165)。言い換えれば、「犬が舐めてくれると僕たちがそこに小さな傷を見つけるように、「やさしさ」を向けられると人々は誰も自分が傷ついていたことに気づかさず、その傷を癒すには「やさしさ」が必要」(165)となったのである。

「やさしさ」に付加されたシニフィエは二点からなる。一つは「気持ちの〈察し〉」である。「相手の気持ちを察し共感することで、お互いの関係を滑らかなものにする」と。その際、「お互いの気持ちを察した上で一種の馴れ合い、又は掛け合いになるように話を進めるのが礼儀」(67)となる。この時、〈察する〉とは「傷ついている相手の気持ちを押し量り」「相手の気持ちに配慮し、わがことのように考える」ことを意味する。換言すれば、相手の気持ちに配慮し、悩んでいる人の気持ちと同一化する。すなわち、相手の状況を自らのことのように受けとめ、その原因や解決方法についてあれこれと想いめぐらし、場合によっては相手に助言すること。要するに他者の問題状況への介入を意味する。

この具体を、大平の『精神病理』第2章のエピソードから展開してみよう。

高校の現代国語の授業。教員は学生の一人に「この文章の、この箇所は何を意味しているのか」と質問した。それに対して学生は「わかりません」と答える。そこで教員は「なぜわからないのか」とさらに問うた。この時、生徒の側に〈察し〉があれば、教員の「なぜわからないのか」という質問に回答することが可能である。すなわち、「なぜわからないのか」という質問のコンテクストとして①どこがわからないのか、②宿題をさぼってきたのか、③授業を上の方で聞いていたのか、のいずれかを教員が提示していることを生徒が了解し、それを〈察し〉ながら回答すれば、このどれかを選択し、対応するはずである。たとえば、自らが不真面目だったことをわびるような仕草をし、かつ不愉快な想いをさせないように茶化しながら「すいません、ボーッとしていました」「タベ、宿題やってたら寝ちゃって」などと、相手の気持ちを踏まえながら回答するのである。これによって両者の関係は滑らかなものとなる。

このような〈察し〉は、結果として当事者間にある種の共有感覚を生んでいく。それがもう一つのシニフィエ、「気持ちの共有による一体化」=「気持ちのわかりあい」(佐藤俊樹)である。

「やさしさ」とは、相手が自分の気持ちを察してくれ、それをわが事のように受け容れてくれるときに感じられるものであり、また、「自分が「やさしい」気持ちになれるのも、自分が相手と同じ心持ちになったときのこと」である。「いずれの場合も「やさしさ」が双方にとって心地よいのは、自分と他人の気持ちのズレがなくなり、一体感が得られる」(48)からである。

他者の精神的な傷の原因への介入、さらには同一化によるコンテンツの共有。それが集団の中で「お互いの気

持ちを察し合うことが、ほのぼのとした暖かみ(72)を生み、「連帯」(69)へと転じていく。このような「集団への志向性」(69)が、英語の語義にもく優しさ>にもない、<ヤサシサ>=「やさしさ」独特の特徴なのである。

注3

(3) “やさしさ”……他者非介入型=相手の気持ちに立ち入らない<気づかい>+集団志向

90年代になり出現したヤサシサが、“やさしさ”=他者非介入型のやさしさである。“やさしさ”は「やさしさ」同様、「集団への志向性/連帯拡大傾向」を備えてはいるが、相手の気持ちに踏み込んで「気持ちを詮索し(=<察し>)ない」(81)よう「気づかみ」(174)ながら、なれ合い、掛け合いをおこなうことによって滑らかで暖かい関係を保つ点で、「やさしさ」と対照をなす。ここでは具体的に“やさしい”状況を、送り手=“やさしさ”を送る側と、受け手=何らかの精神的傷を受け“やさしさ”を受ける側、双方から展開してみよう。

送り手Aは受け手Bが何らかの原因で精神的に困難な状況にあり、傷ついていることに気がついたとする。その際、送り手A=“やさしく”する側が採るべき態度は、相手、すなわち受け手B=“やさしく”される側の気持ちを詮索したり、尋ねたりしないことである。一方、“やさしく”される側である受け手Bも送り手同様、自らの困難な状況の原因を相手に伝えてはならない。言い換えれば気持ちを察せられてはいけない。その結果、そこで取り交わされるなれ合い、掛け合いは、側において何もせず、ただ近くにおいてあげたり、あるいは気分転換のために、たとえば一緒にバカ騒ぎをしてあげるといった類の<気づかい>となる。

このような「人付き合いの技能としての“やさしさ”は、人が(自分も相手も)皆、傷つきやすい、と言うことを前提(178)にしている。「不用意に「親切そーなこと」をして相手を傷つけるのは“やさしさ”にもとり、それゆえ「お互いに相手を傷つけないように「気づかみ」をする」。すなわち「“やさしい”人とおしの“やさしい”関係」とは、傷つき、傷つけられることのないように、関係に立ち入る際に、互いの領域に周到に入り込まないよう予防線を張る」(178)ことで成立する。これは、<治療的>な傷を舐めあう「やさしさ」から、<予防的>な“やさしさ”への変化である。「他者への介入によって互いが傷つくことを避けるため、予防線として介入を踏みとどまることで、互いの滑らかな関係を維持する」というルールが共有されることによって、「やさしさ」と同様、連帯感(ただし、「やさしさ」よりその強度は低い)の確保が可能となるのである。

そして、このような新しい共有ルールこそが、八十年代、辞書に追加されたやさしさの新しいシニフィエ=「傷つけない」(岩波国語辞典)「悪い影響を及ぼさない」(広辞苑)に他ならない。『精神病理』における次の記述は、“やさしさ”の新しい運用例を的確に指摘している。

「気がついてみると、胃にやさしい食べ物、お肌にやさしい石けん、脚にやさしい靴……と様々なやさしいモノが街にあふれています。」(2)注4

注3 存在論的に一体感を得ることのできた共同体の喪失が、このような連帯へ向けてのやさしさ=ヤサシサの引き金の要因となったのではないか?

注4 やさしさとは「ヘルシー」、大平の議論からすれば「傷つけない」ということの置き換えでもある。

Ⅲ “やさしい”人のコミュニケーション=理想の絆の追求と、生身の他者の切断/他者のモノ化

(1) <きずな>と<ほだし>

他者非介入の“やさしさ”を備えた人格は、彼らなりのコミュニケーションの「理想型」を志向する。だが、それは結果として、生身の他者の切断、他者のモノ化を結果するという。これを大平は「絆」という概念を用いて展開している。

大平は「絆」のシニフィエを<きずな><ほだし>の二側面に分類する。<きずな>とは情愛のこもった側面、一方、<ほだし>は情愛関係が結果として生むことになる拘束の側面である(84)。原則的には束縛なしの絆はあり得ない。たとえば、ペットの犬はかわいらしさ、愛くるしさゆえ、飼い主は情愛を覚える反面、食事、散歩、排泄物の処理といった拘束を被る、というように。しかし“やさしい”人たちは<ほだし>のない絆を求めるといふ。大平はこの具体を、二つのエピソードから抽出してみせる。

(2) 例①: ポケベルのささやき……アルカイックなエレクトロニクスのテレパシーとしてのポケベル

第3章「ポケベルのささやき」では、夫婦関係が二人だけに連絡可能なポケベルを所有するという“やさしさ”によって成立する状況が提示される。

司法試験に向け仕事を辞め受験勉強に専念する夫。下着のセールスで家計を支える妻。そのため、夫が自宅、妻が営業で外出という日常。妻の仕事は不定期ゆえ、二人が同じ時を過ごす機会もまた不定期となる。そこで、二人だけしか番号を知らないポケベルを互いに所有することで、いつでも連絡を取れる状況を設定した。ただし、お互いがポケベルを鳴らすことは決してない……。

ここでの問題は「なぜ、鳴らすことを決してしないポケベルを所有するのか」という点である。大平はこれに対し、ポケベルには「<ほだし>がほとんどない」(89)ため、と答える。たとえば電話の場合、話したくない相手からもかかってくる時がある。このとき電話は受話器を取らなければならないゆえ、<ほだし>として機能する。一方、ポケベルは出たくなければスイッチを切っておけばよいし、エピソードのように自分たちだけ話したい相手だけの連絡手段にすることも可能ゆえ、<ほだし>に乏しく“葛藤”を生みにくい。(ただし、絆も弱い。ポケベルは強い絆を求めるのには、はなはだ向かない道具なのだ。)

このようなポケベルの機能を、二人は“やさしさ”ルール=他者不介入に基づいて運用する。ルールは「所有すれども、互いに鳴らさず」である。ただし、ルールへの解釈は、二人の間では一致していない。

夫にとってポケベルとは「妻が自分専用のポケベルを持っていてくれるという事実によって、妻の“やさしさ”を感じることができるもの。そしてそれに対して、妻の仕事の邪魔にならないよう、それを鳴らさないようにすることで妻への“やさしさ”を示すことのできるもの」であると考える。

一方、妻にとってポケベルは「彼に対する劣等感を持ちながらも関係を維持するための装置」として機能していた。妻は、大学時代、夫と同じ大学ではあったが、学部が異なり、夫の所属する学部の偏差値が10も上、しかもは自分よりも夫の方が容姿が麗と認識している。これによって妻は「夫よりも自分は価値のない人間である」との劣等感を持った。そこで浮気をし、浮気相手に対して自分の存在(愛人としての)価値を認めさせることで、

自らの劣等感を払拭していた。

だが、妻は浮気中もポケベルを携帯している。しかし夫は決してポケベルをならさない。この事実を妻は「夫は自分の浮気を薄々感じている。それでもポケベルをならさないのは、彼の“やさしさ” (98)と認識している。

「浮気中にポケベルが鳴ったら「今、仕事なの」って嘘を言うか、「今、浮気しているの」って告白するか、どちらかでしょう。どっちにしても、ひどい事じゃないですか。私がそんな嘘を言ったり浮気の告白したりしなくても済むようにしてくれているわけですよ。」「それが“やさしさ” (99)というわけである。だが実際には、文面から察せられる限りではあるが、夫が妻の浮気に気づいている様子はない。

妻は、不倫の事実を棚上げにし、自分が「嘘」をついたり、あるいは「浮気」を告白するという事態を第三者化しながら、それら行為を自らが余儀なくされることを「ひどい」と発言する。それはプライバシーへの介入となるからである。だが、内面への介入を禁ずるという“やさしさ”のルールからすればこれは適法である。また、その事実を相手からひた隠しにする行為も「知ったことによって相手が傷つく」ということを回避しようとする“やさしさ”によって適法。さらに、自分が一方的に想定した夫のイメージに、夫自身が適法的な行動をとると一方的に判断し「彼はうすうす浮気を感じている。けれども“やさしさ”ゆえにポケベルをならさない」と判断する。そうすれば自分も、彼も、ともに“やさしさ”のルールの中で、〈ほだし〉のない絆が成立することになる。この場合、自分の不誠実さが、自己準拠による“やさしさ”規定によって二重三重に抑圧＝正当化されているのである。

さて、このように二人のポケベルに対する認識はまったくといっていいほどかみ合っていない。しかしながら、それぞれの認識に基づいた結果、「ポケベルをならさない」という行動の一致をもたらしている。換言すれば、実際に連絡を取るのではなく、「専用のポケベルを所有している」という事実が「つながっている」ことになる。だが、もし本当につながってしまえば、それは“やさしさ”のルール＝束縛しない、に抵触する。実際に「繋げる」ことは〈ほだし〉＝〈察し〉を出現させることであり、“やさしさ”のルールを破り、相互の関係を「切ってしまう」ことなのだ。ポケベルは使用されないことで、いわば「アルカイックなエレクトロニクスのテレパシー」(84)の道具として用いられているのである。そして、この一致だけで、解釈がまったく異なっても「私たち、やっぱり、ちゃんと絆でむすばれているんだわ……」ということになる。因みに、相互に〈察し〉で立ち入ることがないので、解釈の内容について尋ねることもタブーとなる。これら手続きによって、それぞれの一方的な解釈は相互に正当性を維持するのである。

これはN.ルーマンのダブル・コンティンジェンシー状況の理想に他ならない。ルーマンはコミュニケーションが二重の偶然によるものであると規定する。コミュニケーションにおいてメッセージが伝達されることはないが、お互いが伝達するという行為をおこなうことで、そこから相互に他者を解釈しようとするモチベーションが起り、そのモチベーションが持続する限りにおいて相互の関係は維持される。これこそがコミュニケーションの基本であると指摘するのである。すなわち、ダブル・コンティンジェンシー理論においては、コミュニケーションは情報が伝達されることによってではなく、伝達という行為それ自体が継続することによって成立するとみなされる。その際、伝達内容の正確性は問われない。あるいはより厳密に言えば、正確に伝わらない状況が、逆説的に他者を理解しようとするモチベーションの引き金となり、コミュニケーションを永続させる契機になると考える

のである。

いささかカリカチュアライズされた本例ではあるが、ここでは両者に共通するたった一つの行動において互いが了解しあう、という幻想が共有されている。それによって、相互にきわめて〈ほだし〉の少ない絆を結ぶことに成功しているのである。

(3) 例②: めいぐるみの微笑み……縫いぐるみ相手に理想の“やさしい”コミュニケーションを実現

ただし、大平はここで妻が必ず一日一回、夫に電話をするという〈ほだし〉の事実が存在したことを記している。そこで、次にこの“やさしさ”を極限まで押し進め、〈ほだし〉をゼロにすることに成功したエピソードとして第4章「縫いぐるみの微笑み」を挙げている。

高校生の少年は、愛犬ポポの死によって精神状態に異常を来すようになる。その原因は、ポポが死によって自らとの“やさしさ”の関係を一方的に解消してしまったことにある。前述したようにペットは人間に比べ〈ほだし〉の少ない存在だが、ないわけではない。なついている時ほど〈きずな〉を感じられるが、食事や散歩に連れに行く点では〈ほだし〉になる。ポポはある日、少年が学校からの帰宅に遅れ世話を怠った時に、突然、死んでしまった。これを彼は、「〈ほだし〉をほんの少し揺るめた」(121) ことに対する仕返しとして、ポポが死をもってお互いの“やさしい”関係を遮断したと受けとめたのである。

そして、これに懲りた少年は、今度は裏切られることの絶対のない縫いぐるみのリスをポポの代用にする。縫いぐるみには心がないから「万が一、失敗しても、リスは傷つかない」、そして「リスが傷つかないから、僕を傷つけることもない」(123)。すなわち、〈きずな〉100%、〈ほだし〉0%の、こちらとの任意な関係を完璧に保つことが可能な、理想的な“やさしい”パートナーである。少年は“やさしさ”関係を取り結ぶ相手を縫いぐるみ=モノにすることで、まったく束縛されない絆を構築したのである。

“やさしい”人は常に「理想」の絆を求める。しかし「理想」とは自己準拠に基づいたルールを相手に一方的に適用することであり、これに近づこうとすれば、それだけ相手との接点は少なくなる。必然的に、この志向が強ければ弱いほど他者との関係は齟齬を来し、関係性からの撤退が極端となる。その結果、関係対象は人間→ペット→爬虫類のような無表情のペット→縫いぐるみ(後者ほど〈ほだし〉は少ない)となる。これで関係は固定、また葛藤が消滅、自分は完全な主人となり、相手を意のままに解釈・操作可能となる。ここにあるのは、他者のモノ化による主体の絶対的主導権の獲得と“やさしさ”ルールの自己準拠による完成である。無論、「やさしい」人間から見れば、それはディスコミュニケーションに他ならないのだが……。

(4) “やさしさ”のアポリア

大平は、“やさしい”人々の特徴についていくつか指摘しているが、これらに共通するのは、ここまで見てきたように他者に関する情報を入手する手だてをほとんど所有していない点である。

たとえば、彼らのコミュニケーションは一方的である。相手に対する気持ちの察しがなく、もっぱらこちらが任意に設定した“やさしさ”を一方的に相手に充ち、フィードバックをおこなわない。前述の「ポケベルのささやき」における夫婦はその典型で、ポケベルに対する相手の意味づけを勝手に想定していた。二人が絆によつ

て結ばれているというのは偶然の結果であった。次に、“やさしい”人は、“やさしい”と、こちらがトップダウン的に認めた人としか関わり合おうとしない。それ以外の、たとえば「やさしい」人は関係を持つ他者としては認知されないのである。それゆえ「やさしい」人の視点からすれば、必然的に“やさしい”人の関わり合いの範囲は極めて限定された狭いものに見える。また、プライバシーを重視する傾向が強い。「自分の本当の気持ち」を人に知られるのが嫌なので、ヒントになりそうな具体的なことを隠して(179)おこうとするのである。となると、互いに自分の心の内はプライベートなことなので、人と関わり合う際も心の内は互いに開かさないということになる。しかも、これは恋人や家族にも適用される。

こうなると、“やさしい”人とは極めてミーイズムが強く自己中心的である反面、対人的葛藤、対人コンフリクトに対する日常的な関与を避け続けるゆえ、一旦関係が不具合になると、途端にその脆弱性を露呈し始める傾向を備えることになる。ただし、その場合も、ヒトに相談することは“やさしさ”に反するゆえ不可能。そこで唯一、信頼のおける「クール」(70)な精神科医へ受診に行く必要性が生じる。精神科医は自分をモノのように扱い、プライベートを守り、“やさしさ”を尊重してくれるからである。

結局、この展開では“やさしさ”が一致するというのは蓋然性、極論すれば「ポケベルのささやき」の夫婦のように偶然性の問題でしかないことになる。というのも、他者の“やさしさ”についてのルールを理解するためには「気持ちの<察し>」による相手の洞察が必要。しかしこれば“やさしさ”からすればルール違反(この「<察し>てはいけない」というルールだけは共有されている)。そこで互いが自己準拠的に「ルールを共有している」という認識、換言すれば「“やさしさ”を共有している」という思いこみだけがルール的一致を保証するものとなる。シニフィアンに対するシニフィエは同一ではないし、あるいはデノテーション、コノテーションのレベルにおいても共通点はないのだから。それゆえ、それぞれの解釈次第でルールが破綻する危険性を常に孕む。必然的に、関係に脆弱性まつきものとなる。また互いのルールが当初は一致したと以为ていても、時が経つに連れてそのルールが異なってくるということも十分にあり得るだろう。そうなれば互いに共有された“やさしさ”は破綻、しかし気持ちを<察し>てはいけないのは絶対的なルールなので、話し合ってコンセンサスを形成する機会もありえない。

たとえば「ポケベルのささやき」の場合、妻は医者に告白し、劣等感が解決したところで浮気をやめる決心をした。劣等感という心のもやもやを吐き出す機会がなかったために起きたこの事態。機会を得られなかったのは彼女が“やさしい”人であったからである。エピソードはここまでで終了しているが、問題はそれからである。解決すれば劣等感が消滅する。それは換言すればポケベルの不要を意味する。しかし夫の方は相変わらず必要。ということは、ここで“やさしさ”のルールが破綻する。つまり二人の間的一致点「ポケベル所有が互いの“やさしさ”を保証する」は、なくなる。そして再び二人には葛藤が……ということが十分考えられるだろう。

よって、解決方法は精神科医に相談を持ちかけ、“やさしさ”を共有できるような意味構造をエンコーディングしてもらうか、再び偶然の“やさしさ”の一致を期待するしかない。後者の場合、その可能性はほとんどないといっても過言ではあるまい。

IV “やさしさ”のグローバリズム

(1) 社会的性格と化した“やさしさ”

しかしながら、大平はこうした“やさしい”性格が、もはや、いわば社会的性格と化しており、しかも“やさしい”者どうしの“やさしさ”あふれるコミュニケーションが、かなりの確率で成功を収めている、と指摘する。ならば、このような一見ディスコミュニケーションのように思われる“やさしさ”も「やさしさ」同様、一般化されたルールを備えていることになる。すなわち、自己準拠だけでコミュニケーションが成立しているのではなく、むしろ新しいコミュニケーション形式が存在していると考えなければならぬ。換言すれば、“やさしい”人たちがディスコミュニケーション状況にあると判断するのは、彼らのコミュニケーション性を捉えていないに過ぎないことになる。ただし、相手の気持ちを察しないでコミュニケーションを図る、すなわち、内面は解らないという状態で関わり合うのだから、その形式＝ルールは「やさしさ」のそれとは質的に異なる側面で成立しているはずである。「やさしさ」には<察し>によるコンテキストの了解というルールが存在していたが、“やさしさ”にも了解のための同様の機能が存在すると考えるべきであろう。

(2) 沈黙の両義性……気持ちを<察する>「やさしさ」と、察しないよう<気づかう>“やさしさ”

“やさしさ”に基づく新しいコミュニケーション形式を考察するため、再び大平の記述に戻ろう。ここで注目したいのはコミュニケーションにおける<沈黙>の持つ意味である。これを「やさしさ」と“やさしさ”を対比しながら考察したい。

まず、「やさしさ」においては<沈黙>は避けるべきことであつた。「やさしさ」のルールでは、コトバは相手との一体感を持つための重要な道具。「やさしい」コトバをかけ合うことで、滑らかな関係が保たれ(174)た。たとえば、「腹を立て」「自分が相手に傷つけられたのだと感じ」た時、「その傷は相手によって癒されねばならない。「相手が僕たちを傷つけたのが、悪意によるものではないこと、不注意あるいは不可抗力によるものであつたことを『きちんと説明』(175)する必要がある。そして、このようなルールが他者の気持ちを<察する>際、参照するコンテキスト形成の苗床となつていた。すなわち、「話さなければ解らない。「やさしさ」は、いわば近代的自我による明瞭性を志向しているものであり、沈黙することは不誠実なことだとされたのである。大平はこのような「やさしさ」に基づく<沈黙>の嫌悪が原初的なものではなく、「やさしさ」世代に特有の傾向であると指摘する。「公平に考えてみると、沈黙を嫌う「やさしさ」というのが僕たちの歴史のなかで、かなり特異なことだったのかもしれない(174)というのである。

しかしながら“やさしさ”において<沈黙>は歓迎すべきこととなる。というのも“やさしさ”にとって、コトバは、互いの気持ちに立ち入り、互いを傷つけるおそれのある「危うい道具」(174)であるからだ。それゆえ“やさしい”人々は「お互いの気持ちに立ち入らぬよう細心の注意をはらいながら、空疎な言葉を交わす一方で、コトバのいらぬウォームな関係を大切にする。」(175)

以下、第五章「沈黙のぬくもり」のエピソードに登場するカナダ人女性による<沈黙>の解釈は、“やさしさ”に基づく新しい<沈黙>の機能を的確に示している。

「言葉はヤサシサの邪魔になるんです。お互いの気持ちには立ち入らないで、お天気の話とかテレビ番組の話とか旅行の話とかを喋って仲良くしているのがヤサシイ（この場合の<ヤサシサ>は“やさしさ”の意。筆者注）と思う。だけど、一緒に音楽聞いたり、ファミコンやったり、マンガ呼んでいるのはもっとヤサシイ。何も喋らないで一緒にいて、何かやっている。これが私のいうヤサシイ暖かい沈黙」（158）

相手の気持ちに立ち入ることで互いを傷つけてしまうのを事前に避けようと配慮すること。つまり<察し>がないように注意すること。そうすることで、互いの滑らかな関係が形成されると同時に連帯感が生まれる。このような配慮は「やさしさ」の<察し>に対して、既述したように“やさしさ”のための<気づかい>（174）という言葉で対置させられている。換言すれば、“やさしさ”には<気づかい>によるコンテクストの了解というルールが存在する。そこで了解されるコンテクストとはメッセージそれ自体ではなく、メッセージに触れないと言うことで「あなたを傷つけない」ことを伝達するメタ・メッセージに他ならない。そしてそのような<気づかい>の手段・作法の一形態が<沈黙>なのである。

（3）孤立と連帯を保证する<沈黙>

しかし、“やさしさ”に基づく<沈黙>には、「傷つけない」ことの他に、もう一つの側面がある。他者を傷つけないためにはコトバという危ない道具の使用を止めて沈黙するよりも、さっさと相手の前から立ち去ればよい。事実、第4章に登場したペットに死なれた少年は、縫いぐるみをパートナーとすることで同様の効果を獲得した。少年は相手として縫いぐるみを選んだのだが、それは結果として他者からの撤退と構造的には同質といえる。しかし、このような戦略を採ることは稀である。むしろ、一般的には気づかたり、沈黙していたとしても、他者と何らかのかたちで関わりを持ち続けようとする。それゆえにこそ、“やさしさ”は「精神病理」として対人関係上のコンフリクトを発生させるのだ。

このように考えれば<気づかい>そして<沈黙>とは、相手との連帯を維持しようとする手段でもあることがわかる。前述のカナダ人の発言をさらに引用しよう。

「両手でコーヒーカップを持って、掌を暖めながら黙ってコーヒーをすするんです。そう、黙ったまま……その暖かい雰囲気は私も好きになりました。おたがいキツカイする必要もないほど親密になると、もう言葉なんか要らなくなるんです。」（147）

これは中野収が70年代に指摘したカプセル人間における基本的行動様式の一バリエーションに他ならない。勝手気ままにしていたい。ならば一人でいればいい。しかしそれでは寂しい。そこで空間を共有し、なんらかのメディアをコミュニケーションに介在させることで互いの勝手気ままな行動を許容し、孤立と連帯双方を獲得する。このような人格を中野はカプセル人間と名付けたのであった。たとえば、喫茶店で同席しながら、お互いはマンガを読んだり、日記をつけたり気ままなことをする（当初、中野が挙げたエピソード。この場合のメディアはマンガ、日記）。あるいはカラオケ・ボックスの中、参加した仲間それぞれが自由に行動（曲探し、映像への耽溺、隣の仲間との私語、歌う事への耽溺）を行う（この場合のメディアはカラオケというメディア機器＝システム）。それぞれの行為はバラバラで、行為それ自体に連帯はない。だが、これらはメディアを介して空間を共有し、時に儀礼的行為を挟む（喫茶店の場合、気が向いた時に会話する。カラオケ・ボックスの場合、間奏中と

終了時に拍手を入れる等) ことで見事に孤立と連帯のバランスが保たれる。

<気づかい>や<沈黙>が、このようなカプセル人間にとってのメディアと同様の機能を果たしていることは明かであろう。<気づかい>、<沈黙>という抽象的なメディアを運用することによって、孤立(=身勝手・自己準拠)と連帯という、本来であれば対立するものを同時に獲得可能となるのである。そして<沈黙>の場合、これが習慣化すれば<気づかい>する必要すらなくなる。それは“やさしい”人々にとっては、最も快適な「親密な関係」と言うことになるのである。言い換えれば“やさしさ”の作法とは、連帯しながらもそれぞれが自己準拠に基づく行動様式を可能にすることに他ならない。一緒にいて好き勝手に何をやっても介入しない。すなわち、互いに傷つけないという強いルールがあれば、安全、かつ安心であり、お互いのために都合がよい。そういう他者とは一緒にいたい。つまり、連帯したい、というわけである。認識論上で介入しないこと、メッセージを共有しないことを了解し、存在論上でそのルールの共有を前提した上で、相互の自由を許容する、というコミュニケーションルール=社会化の形式が、ここには成立している。

以上、ヤサンサ=二つのやさしさの相違点を要約すれば「存在論上の同質性に基ついて、認識論上でも同質性を要求するのが「やさしさ」、存在論上の同質性に基ついて、認識論上の異質性を要求するのが“やさしさ”」と結論づけることができよう。

(4) 領域解消的な、グローバリズムとしての“やさしさ”

『精神病理』が著されたのは95年。9年後の現在、“やさしさ”は、かつて以上に市民権を獲得した。今や社会の至るところに孤立と連帯を保証するメディアが整備されている。移動体通信(以下ケータイ)、個室居酒屋、スターバックスに代表されるシアトル系コーヒー店。これらのコンセプトに共有するのは「他者と繋がっていながら、それぞれは思い思いに行動することが許容される」点である。ケータイは、通話よりもむしろメール機能が若者の支持を得ている。これは紛れもなく、大平がエピソードとして用いていたポケベルの21世紀の形態に他ならない。個室居酒屋はスペースをパーティーションで仕切りコンパートメント化することで、プライベートを確保し、身内だけでよろしくやるという環境を整えている。スターバックス・コーヒーは快適な椅子を用意し、一方で窓を大きくとることで自室でもパブリック・スペースでもない「第三の空間」、すなわちプライバシーを守りながら、街という人混みの中にいる居心地のよいスペースを構築している。言い換えれば、“やさしさ”はわが国において社会的性格として既に認知を受けているのである。

だが、それだけではない。大平は、一歩踏み込んで、“やさしさ”が「やさしさ」と異なり、日本国内だけでなく、インターナショナルな、そしてグローバルなコミュニケーションを開く可能性すら秘めていると指摘する。その根拠は“やさしさ”が前提する「異質性の尊重」にあるという。再びカナダ女性の言葉を引用してみよう。

「人は皆、違っている。異質。それが前提ですよね。それだけに、どんなに違っているでも権利として平等に扱われなくてはならないという理想が生まれるわけなんですよ」(145)

「世界中の若い人が他人には自分の気持ちに立ち入って欲しくないと考えている。……少なくともアメリカの若者たちです。でも、私は、これはかなり国際的な若者のサブカルチャーだと思いますよ。」(160)

P. ブルデューが指摘するように、人間はハビトゥス、すなわち当該文化でヒトが生まれてから家庭や社会で

身につけた様々な慣習に基づいて行動する。そしてハビトゥスが共有されている範囲においてのみ、人々は無意識のうちにそれぞれの言動のコンテクストを理解し、その結果、円滑なコミュニケーションがはかれる。だが異文化間においては、ハビトゥスの共有はない。それゆえ、しばしば互いが自らの立場に依拠しながら、相手文化を認識する。多くの場合、それが誤解を生み、文化摩擦を発生させる。

「やさしさ」に基づいてこの誤解を解こうとすれば、互いにその違いをコトバによって開示し、共通点を見いだす、ということになる。しかしこの戦略は実質的には効果が薄い。ハビトゥスは人々の思想、感情、身のこなし方など、あらゆる側面に浸透しており、説明し尽くすことは不可能。コトバによる内容の開示は、むしろ、さらなる誤解を招くことにもなりかねないからだ。

この時、有効となるのが“やさしさ”に基づくコミュニケーションである。“やさしさ”は、相互に立ち入らないという作法。それは結果として「他者は解り合えない」という前提となり、それゆえにこそ、互いが「異質」であることを認めるという心性が生まれる。このように異質な他者と関わり合うためには、ハビトゥスの共通部分を探り合うよりも、その異質性を許容し、それぞれの行動に干渉しないことが、もっともシンプルかつ効果的な手段となる。グローバリズムとは共通点の模索ではなく「異質であることの許容」というルールの共有によってもたらされるのだ。解り合えない、でも連帯したい。それならば解り合えないと言うことを相互に了解しながらコミュニケーションに臨めばよいのである。付言すれば、現代人が“やさしさ”を採用し始めたのは、ハビトゥスが一文化圏内に置いてさえも通用しなくなった必然的結果であると考えられるであろう。それは国際間における多様性の構造が、情報化によって国内にまで波及したことを示唆している。

情報量の膨大化と価値観の相対化が進むポストモダン状況では、かつての「やさしさ」のように相互のメッセージ内容を開示することで情報を共有し、そこからコミュニケーションの円滑化を図るという戦略の有効性は乏しい。一致点を探すためには多大なる労力を必要とする。そこで“やさしさ”のように相互の立場を尊重し、互いのメッセージ＝情報に介入しない、しかし空間や時間といった状況を共有するという儀礼が、むしろコミュニケーションを保証するメディアとなる。換言すれば、コンテンツの共有ではなくフォルムの共有ということだろう。そして、これこそがグローバルな新しいコミュニケーション・スタイルのルールである“やさしさ”の正体なのである。

(5) 解り合えないことを前提とした上でのコミュニケーションの可能性

最後に、このような“やさしい”人による「解り合えないことを了解し合うコミュニケーション」は、どのようにして親密性を構築しうるのかについて、大澤真幸の議論を援用しながら考察しておきたい。

一つは「純粋な関係性」(A. ギデンス)に基づくコミュニケーションである。ただし、これは「やさしさ」的なコンテンツ共有をある程度、前提とする。

情報化社会の価値観多様化は、共有するパラダイム＝コンテンツを所有している人間の数を限りなく減少させてしまった。反面、その希少なパラダイムを共有する人間を搜索するシステムも用意した。その最たるものはインターネットである。ネット上では、無限に存在するサイトやBBSの中から自分に合ったサイトを見つけることが可能だ。サイトやBBSを検索し、そこから自らの知識＝パラダイムや任意に決定したルールが適応可能なもの

を選択してこれに参加する。当然ながら、それらマイクロ・コスモスの中の住民は、ルールを多くを既に習得している。それゆえ、参加者の当該の世界における行動の自由度は限りなく大きくなるのである。そこでコミュニケーションは一般的な他者からは世界が閉じられているが、当事者たちにとっては大きく開かれている。必然的に、その領域ではメンバーどうしの共感度は異様に高く、熱狂的に盛り上がるのが許される。(大澤27)

しかし、もちろん、ここにも“やさしさ”のルール、「異質性の尊重による孤立と連帯」というルールは厳密に適用されている。それゆえコンテンツの開示によるメッセージの交換によって形成される親密性は、原則的にサイト上のトピックに関する事項だけに限定される。トピック外に話題が広がることは“やさしさ”にもとり、介入と受け取られるからである。逆に言えば、このようなルール違反が発生した場合、メンバーは、そのBBSから自主的に立ち去っていく。あるいは継続される場合には、“やさしさ”ゆえに解決の術がないので、ネット内での争いはフレミングなどの激烈なものとなる。

(6) 共鳴・共振だけでつながるといふこと……シンクロ率を高める

もう一つは「シンクロ率」を高めるコミュニケーション、換言すれば究極のカプセル人間化である。

空間を共有し、メッセージを交換することなく、メディアに対して相互並列的に反応し、それに対して肉体的、精神的に同様の反応を引き起こすことで共鳴・共振すること。たとえばクルマという「メディア」によるドライブ。車内空間を共有し、クルマの振動に揺られ、同じ景観を眺め、目的地を共有する。あるいは前述のエピソードのように、狭い空間の中で相手とともに「両手でコーヒーカップを持って、掌を暖めながら黙ってコーヒーをすする」(147)。さらにはカラオケ・ボックスという「メディア」で椅子と音とカラオケ・システムを共有する。これらはコトバの危険性を回避しつつ、親密性を高める手段である。そして、この共鳴・共振の割合、すなわち「シンクロ率」が高まり「完全な共鳴・共振によってつながってしまえば、もはや個体間の区別は無意味化してしまうので、全体として単体になる」(大澤49)

このような外部的・身体的な共鳴、共振は、行っていさえすれば、共鳴している個々人はそれぞれどのように意味づけをしていようがシンクロ率は高まる。それこそがエピソードに登場したカナダ人女性の用いる「親密」性に他ならない。このような新しい親密性によって取り交わされるコミュニケーションは、近代的自我を備えた個によるコミュニケーションとは異なるものだ。そして、それはおそらく、結果としてまったく新しい形的人格像を結実させることとなるだろう。われわれは、その過渡期の現象として“やさしさ”を見いだしているのではなからうか。

表2 「やさしさ」と“やさしさ”

		「やさしさ」	“やさしさ”
定	義	相手の身になり、自分のことのように考える	相手の内面に立ち入らない
対	他者ベクトル	他者介入	他者非介入
タ	タイプ	治療型	予防型
基本的	スタンス	察し	気づかい
傷に対する	対応	傷を舐めあう	傷つけない、傷に触れない
コン	テクスト	背後に共有されるメッセージが存在すると、互いに認識している	背後に共有されるメッセージはないと認識している。ともに傷つきやすいという前提を共有
絆	<きずな>	強い	強い
	<ほだし>	強い	弱い(ゼロを志向)
沈	黙	苦痛(ことばが必要)	歓迎(ことば不要)
涙	グチ	歓迎	おことわり
感	受性	弱い(鈍い)	強い
関係性の	メタファー	ボトムアップ	ウオーム
他者	評価の方法	ボトムアップ	トップダウン
一	体感	メッセージの共有によって達成	身体の共鳴・共振によって達成
適用	可能性	ローカル	グローバル
認識上	の要求	同質性	異質性
共有	するもの	メッセージ	メディア
	重視されるもの	内容	形式
存在論上	の要求	同質性	
共通点	=ヤサシサ	他者との円滑な関係をはかる集団志向。互いにやさしさを振り向けあうことでなめらかな人間関係を結ぼうとする。	

文献

- ・東浩紀『動物化するポストモダン、オタクから見た日本社会』講談社現代新書、2002
- ・A. ギデンス『親密性の変容』而立書房、1995
- ・佐藤俊樹「解体する日本的コミュニケーション—「気持ちのわかりあい」の生成から崩壊まで」『ポップコミュニケーション全書』アクロスブック、PARCO 出版、1992
- ・N. ルーマン『社会システム理論上・下』恒星社厚生閣、1993
- ・中野収『現代史の中の若者』三省堂、1987
- ・大平健『やさしさの精神病理』、岩波新書、1995
- ・大澤真幸、町澤静夫、香山リカ『心はどこへ行こうとしているか、クロス・トーク! 社会学 vs 精神医学』、マガジンハウス、1998
- ・富田英典・藤村正之『みんなぼっちの世界』恒星社恒星閣、1999

